

学校自慢

生徒会活動を通じた 自己肯定感の育成

～南十字星が輝くとき～

佐倉市立臼井南中学校長

まえばやし のりこ
前林 典子



1 はじめに

本校は美しい街並みと自然に恵まれた開校23年目の学校です。「汗をかく」を学校教育目標に掲げ、全生徒、全職員をあげて学校生活の様々な場面で「汗をかく」ことに努めています。

中でも生徒会活動は、生徒自身の自治的・自主的な活動能力を育成する場として本校の特色です。主な生徒会行事は年間7回ありますが、どの行事も「生徒の手」で作り上げることを第一にしています。

2 全校集会

全校集会のねらいは、生徒に発表の場を与え自信を持たせることと、歌声活動の活性化です。特に、本校の生徒は思考したり判断したりする能力は大変秀でていますが、人前で自分の考えを述べたり伝えたりすることが苦手な生徒が多く、その克服が彼らの自己肯定感を高めることにつながると考えています。今年度は、生徒会担当教員が作成した綿密な年間計画とタイムスケジュールをもとに、全校集会を年間5回行います。各回とも、パワーポイントを用いたり寸劇を取り入れたり、工夫しながらの委員会や学年行事等の発表を通し、生徒を前面に出し成就感を積み重ねていくよう計画しています。先日、二回目の全校集会がありましたが、生徒が発表することが楽しみになっている様子が伺えました。

3 生徒総会

「南十字星」が今年度の生徒会活動方針です。総会で生徒会長から次のような説明がありました。

「校章は、開校当時の学校目標であった、知・徳・体・和から成る南十字星をもとに作られている。23年経った今、生徒が替わり、多くの伝統を引き継ぎ、新しくなっていく臼井南中だが、自分から行動するという『活発さ』がなくなってきている。もう一度活発な学校にするために、今、僕たちに合った十字星を輝かせることが必要と考えた。」

自分たちを客観的に見つめ、伝統を生かすつつも改善していこうとする前向きさ、逞しさを感じます。実際、生徒総会での子どもたちの姿は話す側も聞く側も、共にすばらしい態度でした。

4 最後に

今年度は、「文化祭」を本校独自の名称に変更する予定です。生徒会本部が提案し、「評議会→学級→評議会→全校」の流れで進めています。教師からのトップダウンでなく、生徒が納得できること、生徒の手で変更することを大切にしています。時間もかかり指導にも手間が必要です。しかし、このような取組は、本校の伝統であり、生徒の成就感につながっています。

生徒会活動は、生徒の自己肯定感を高めるための施策の一つですが、教員による支援、指導あつての教育活動です。生徒会本部担当教員以外の教職員も、作り上げる成就感を共に味わうことで、生徒の成長はもちろん、教職員の成長、ひいては教職員の自己肯定感の向上につながることも期待するところです。

生徒と全職員が共に力を合わせ、平成29年度はこれまで以上に南十字星を輝かせたいと思います。

提

言

仕事・社会への円滑な接続を図る授業改善

～アクティブ・ラーニング及びカリキュラム・マネジメントの観点から～



神田外語大学外国語学部国際コミュニケーション学科特任教授 いけだ 池田 まさのり 政宣

1 はじめに

平成27年度末に県立高等学校長を定年退職し現職として勤務している。演習で学生のレディネスに差があること、つまり高校までの「言語活動」の成果に差異を感じることがある。現行学習指導要領において「思考力・判断力・表現力」の充実が求められているが、「何を理解しているか」とどまっている感を持つ。高校教育に携わってきた者として、責任を感じるとともに内心忸怩たる思いもある。その意味で次期学習指導要領の方向性に注目している。

「何を学ぶか」が示されてきた学習指導要領の歴史的変遷のなか、今回は「どのように学ぶか」が示された初の改訂と言える。本稿では、次期学習指導要領が求める、仕事・社会への円滑な接続を図る授業改善について、アクティブ・ラーニング及びカリキュラム・マネジメントの観点から述べる。

2 仕事・社会への円滑な接続を図る授業改善

(1)アクティブ・ラーニングの視点

改訂に盛り込まれるとの報道がなされるやいなや、急速に過熱感を高めたものがアクティブ・ラーニングであった。書店には様々な書籍が並び、なかにはグループワークといった学習形態自体を目的とするような解説書の類も多く見られた。たしかに、理解を深めるために多くの議論がなされるのは結構なことではあるが、用語が独断専行していくことは望ましいことではない。結果、改訂案では、答申まで使われていたアクティブ・ラーニングが、非常に多義的

で概念が成熟していないとの理由で使われていない。誤解してはならないのは、不要な用語として除かれたのではなく、適切な理解醸成が図られないなか法令用語としての使用を避けた対応と言える。

ここで、アクティブ・ラーニング研究の第一人者である溝上慎一が、アクティブ・ラーニングについて、「学校から仕事・社会へのトランジション」を背景にしていると述べていることを紹介する(溝上, 2014)。さらに、溝上は、「生徒を仕事・社会に力強く送り出していくために、学校教育での育成課題が見直されている。」とした上で、「大学教育だけの問題ではないし、初等中等教育だけの問題でもない。両者が、一つの同じ用語で、仕事・社会の出口をにらんで、それぞれの教育段階でできることを、下と上の段階もにらんでリレーして取り組んでいくことがなにより重要である(=トランジション・リレー)。」と述べていることに注目したい(溝上編, 2016)。「21世紀型能力」、「社会人基礎力」及び「基礎的・汎用的能力」等、紙幅の関係で個々の説明は避けるが、これらは、まさに社会が子どもたちに求めている能力である。言い方を変えれば、児童生徒を育てる教育界に対する、仕事・社会への円滑な接続を求めてなされた、社会からの強い要請である。そして、今次の改訂で求められていることは、そうした能力を育成するため、アクティブ・ラーニングを共通の用語として、校種間をつなぐ学びのリレーとする授業の質的改善なのである。

アクティブ・ラーニングは、毎時、決め

られたようにグループを作ったり、ディスカッションをするといった形式的な問題では全くない。それでは「活動あって学びなし」の批判を受けるのは当たり前である。アクティブ・ラーニングは、授業改善の視点であり、特定の形式ではないということを強調したい。

(2)カリキュラム・マネジメントの重要性

次期学習指導要領では、児童生徒に対し、学習内容を自身の人生や社会の在り方と結び付けて深く理解させることが求められていると言える。教師に求められているのは、授業を省察することであり、自校の児童生徒に正対し、校内だけで完結させてしまう知識・技能の習得にとどまらず、生涯にわたって通用する資質・能力として育成しなくてはならないのである。そのため、授業計画のなかに、児童生徒の頭がアクティブに動くこと、児童生徒の頭のなかに「主体的・対話的で深い学び」を実現していくための適切・効果的な場面を創意工夫して組み込んでいくことが求められている。そして、それを個人の取組から全校的な営みとして実現させていくものがカリキュラム・マネジメントである。カリキュラム・マネジメントとは「各学校が、学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営み」と捉えることができる(田村, 2011)。カリキュラム・マネジメントの概念を初めて導入した中留武昭は、その背景を「静態的な教育課程観」から脱皮するためと説明した。中留によれば、教育課程には「教育委員会届け出用の文書」、そして「年度初めに一度編成したら変えてはならない文書」という硬直化したネガティブなイメージがあり、動態化による学校改善を図ったということである(中留武昭, 2005)。中留の調査・研究から早10数年を経過したが、程度の差こそあれ、多くの学校では、依然として「静態的な教育課程観」のままであるというの

は言い過ぎであろうか。

教育関係者は、今次の改訂を児童生徒の仕事・社会への円滑な接続を図る学びの実現の好機と捉え、校内で熟議を重ね、校種をつなぐ連携した取組としていかななくてはならない。

3 おわりに

最後に、溝上による興味深い調査研究が行われていることを紹介する。溝上によれば、「質的転換答申」を経て大学ではその成果も明らかになっているところであるが、大学生になってからではなかなか態度変容できない高校生が存在することも明らかになっているとしている(河合塾, 2014)。溝上は、高校時代までにタフなコアが出来上がっているのではないかという仮説を立て、平成25年から高校2年生を10年間にわたって追跡する「学校と社会をつなぐ調査」を実施している(溝上責任編集, 京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾編, 2015)。仕事・社会への円滑な接続を図る校種をつなぐ学びの 릴ーの観点から、今後の研究報告に注目したい。

【引用文献】

- 河合塾編(2014). 「学び」の質を保証するアクティブラーニング—3年間の全国大学調査から—東信堂
- 溝上慎一(2014). アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂
- 溝上慎一責任編集, 京都大学高等教育研究開発推進センター／河合塾編(2015). どんな高校生が大学, 社会で成長するのか「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ. 学事出版
- 溝上慎一編(2016). 高等学校におけるアクティブラーニング: 理論編. 東信堂
- 中留武昭編著(2005). カリキュラムマネジメントの定着過程—教育課程行政の裁量とかわかって. 教育開発研究所
- 田村知子編著(2011). 実践・カリキュラムマネジメント. ぎょうせい